

## はだかの王さま

むかしむかし、とある国のある城に王さまが住んでいました。王さまはびっぴかの新しい服が大好きで、服を買うことばかりにお金を使っていました。王さまののぞむことといたら、いつもきれいな服を着て、みんなにいいなあと言われることでした。戦いなんてきらいだし、おしばいだって面白くありません。だって、服を着られればそれでいいんですから。新しい服だったらなおさらです。一時間ごとに服を着がえて、みんなに見せびらかすのでした。ふつう、めしつかいに王さまはどこにいますか、と聞くと、

「王さまは会議室にいらっしゃいます。」と言うのですが、ここの王さまはちがいます。「王さまは衣装部屋にいらっしゃいます。」と言うのです。

城のまわりには町が広がっていました。とても大きな町で、いつも活気に満ちていました。世界中のあちこちから知らない人が毎日、おおぜいやって来ます。

ある日、二人のさぎ師が町にやって来ました。二人は人々に、自分は布織り職人だとウソをつきました。それも世界でいちばんの布が作れると言いはり、人々に信じこませてしまいました。

「とてもきれいな色合いともようをしているのだけれど、この布はとくべつなのです。」とさぎ師は言います。「自分にふさわしくない仕事をしている人と、バカな人にはとうめいで見えない布なのです。」

その <sup>はなし</sup> <sup>き</sup>話を聞いた人々はたいそうおどろきました。たいへんなうわさになつて、たちまちこのめずらしい布の <sup>ぬの</sup> <sup>はなし</sup> <sup>おう</sup> <sup>みみ</sup> <sup>はい</sup>話は王さまの耳にも入りました。

「そんな <sup>ぬの</sup>布があるのか。わくわくするわい。」と、<sup>ふく</sup> <sup>だいす</sup> <sup>おう</sup> <sup>おも</sup>服が大好きな王さまは思いました。「もしわしがその <sup>ぬの</sup> <sup>ふく</sup> <sup>き</sup>布でできた服を着れば、<sup>けらい</sup> <sup>なか</sup> <sup>たく</sup>けらいの中からやく立たずの <sup>にんげん</sup> <sup>にんげん</sup> <sup>み</sup>人間や、バカな人間が <sup>み</sup> <sup>ふく</sup> <sup>み</sup>見つけられるだろう。それで服が見えるかしこいものばかり <sup>あつ</sup> <sup>くに</sup>集めれば、この国ももっとにぎやかになるにちがいない。さっそくこの <sup>ぬの</sup> <sup>ふく</sup> <sup>つく</sup>布で服を作らせよう。」

<sup>おう</sup> <sup>かね</sup> <sup>ようい</sup> <sup>し</sup>王さまはお金をたくさん用意し、さぎ師にわたしました。この <sup>かね</sup> <sup>か</sup> <sup>ね</sup>お金ですぐにでも <sup>ふく</sup> <sup>つく</sup>服を作ってくれ、とたのみました。さぎ師はよろこんで <sup>ひ</sup> <sup>う</sup>引き受けました。

(青空文庫版)

ハンス・クリスチャン・アンデルセン

大久保ゆう訳

[https://www.aozora.gr.jp/cards/000019/files/46319\\_23030.html](https://www.aozora.gr.jp/cards/000019/files/46319_23030.html)